(77)

氏名(生年月日)　宮澤　佑二（ミヤザワ　ユウジ）
本　　籍
学位の種類　医学博士
学位授与の番号　乙第891号
学位授与の日付　昭和63年2月19日
学位授与の要件　学位規則第5条第2項該当（博士の学位論文提出者）
学位論文題目　**CCU における精神症状とリハビリテーション**
論文審査委員　（主査）教授　広沢弘七郎
（副査）教授　鎮目　和夫，教授　野本　照子

論文内容の要旨

目的

急性心筋梗塞（以下 AMI）患者の精神状態は不安定であり，その上救命第一の治療原則から，隔離された環境におかれ，強制的安静を強いられる為，精神症状の発現する例があり，CCU（Coronary Care Unit）の治療上大きな問題である．救命しえても，精神的な障害を受け，身体的能力の低下したまま退院し，その後の社会復帰に問題があるのでは十分な治療とは言えない．この観点から，著者は，A）AMI 患者について強制的安静期間と，その後のリハビリテーションの内容がどの程度，精神症状発現に影響するかを調査した．更に，B）その結果をもとに積極的なリハビリテーションを行なう事により，発現を予防し，減少させる事がどの程度可能かを前向きな研究で検討した．

対象及び方法

CCU に収容された196人の AMI 患者を対象とした．CCU のスタッフを悩ませる著しい意識障害（幻覚，妄想，せん妄状態），極度のうつ状態が出現した例を精神症状発現例とした．年齢，性別，重症度（酵素値，Killip 分類）リハビリテーションの進行度，入院日数，運動能力の各項目と発現の関係を検討した．

調査—A（対照期間）では，従来の規定によるリハビリテーションを主治医の判断に任せて行なった．調査—B（積極的なリハビリテーションを行なった期間）では，リハビリテーションを入室2～3日に開始し，自立を7～10日以内として床上安静期間を短くし，一定の内容を毎日行なうようにした．

結果及び考察

1．対照期間（調査—A），99例での精神症状発現率は，10.1%で，60歳以上の高齢者であった．入院2日以内は，意識障害（幻覚，妄想，せん妄）のみで，3日以降の遅い時期は，うつ状態が多かった．

2．発現例は，正常例と比べ，自立までの期間が長く，リハビリテーション進行度が遅く，入院期間も長かった．また，最終歩行可能距離からみた退院時の運動能力も低下していた．

3．調査—A と調査—B では年齢，性別，重症度でみて有意の差はなかった．

4．積極的リハビリテーション期間（調査—B），97例に対し，積極的なリハビリテーションを行なった結果，精神症状発現率は4.1%と減少した．内容的には，3日以降の発現例は無くなり，日中に発現するうつ状態が減少した．また，死亡率の増加はなかった．

結論

入室3日以内に開始し，床上安静期間を短くする，積極的なリハビリテーションは，CCU に収容された AMI 患者に発現する精神症状，特にうつ状態に対して予防的効果のある事が示唆された．

論 文 審 査 の 要 旨

急性心筋梗塞のリハビリテーションは欧米と日本とでその実態が著しく異なる．その差異のよって来たる所は，必ずしも内科学的な病状の差だけでなく，国家の経済のレベルでも論じられている．

本研究はわが国の首都東京における，長年にわたる臨床経験を積んだ著者が宮城県，仙台という異なった社会学的環境を持った土地において，多数の急性心筋梗塞患者のリハビリテーションに就き，精神医学的考察を加えたもので，臨床医学に資するところ，大である．

主論文公表誌

CCU における精神症状とリハビリテーション
東京女子医科大学雑誌　第57巻　第12号
1472～1481頁（昭和62年12月25日発行）

副論文公表誌

1）ニトログリセリンの冠動脈拡張作用および血行動態に対する作用―舌下，静脈内および冠動脈内投与の比較―
呼吸と循環　34（10）1087～1091（1986）

2）心不全に対する TA-064（Denopamine）の臨床的検討―Dopamine からの離脱例および長期投与例に対する検討―
基礎と臨床　20（1）245～252（1986）

3）心室中隔欠損症における三尖弁限局性細菌性心内膜炎
呼吸と循環　29（9）1009～1014（1981）

4）肺循環障害―肺動静脈瘻―
臨床成人病　9（6）995～1001（1979）

5）ラット視床下部神経終末部からのソマトスタチン分泌に対する高カリウムイオン，カルシウムイオンおよびドーパミンの影響
ホルモンと臨床　26（6）541～544（1978）